

藤田大介・野田幹雄・桑原久実 編著

磯焼け対策シリーズ① 海藻を食べる魚たち—生態から利用まで—

海の魚は、多くが肉食性で、動物プランクトン、海底の小動物や小魚などを食べて生活しているが、中には成長につれて海藻や海草も食べるようになる魚がいる。これら食物に海藻や海草が含まれる雑食性の魚類は植食性魚類と呼ばれる。近年、全国各地で海藻や海草の群落である藻場が衰退しており、南日本を中心に、その原因の一つと考えられているのが植食性魚類である。

なぜ、近年になって植食性魚類が日本の藻場を衰退させるようになってきたのか。外国でも起きているのか。どんな暮らしをしているのか。うまく獲る方法はないのか。彼らの食害から藻場を守る方法はないのか。そもそもおいしく食べられないのか。尽きぬ疑問を胸に抱き、今、全国各地の様々な研究者が植食性魚類の対策に取り組んでいる。

本書は、平成16年度から始まった水産庁緊急磯焼け対策モデル事業の成果をもとに、植食性魚類の生態、漁獲、利用、藻場の保護方法などの最新情報を解説している。執筆者は、生簀割烹の店主をはじめとし、民間企業、地方自治体、大学、独立行政法人試験研究機関さらに水産庁の役職員までと、とても幅広い顔ぶれである。このことに現れているように、本書は、広域に及ぶこの問題が小手先の技術だけで解決できるものではないことを知らせ、1人でも多くの人々にいろいろな立場から対策等を考えていただく契機とすることを意図している。



成山堂書店, A5判, 261頁, カラー口絵8頁, 2006年, 定価3,800円+税, ISBN 4-425-88301-2

食べられてしまう側という貴重な視点にも立てる藻類の研究者にとって、本書は、沿岸の海域環境の変化を把握しつつ海藻や海草の生態を解明してゆく上で、極めて重要な一冊である。主な章立ては以下の通り。

1. 植食性魚類とは？
2. 2005年の全国アンケート調査から
3. 魚による各地の藻場衰退の現状
4. 植食性魚類の生態を探る
5. 植食性魚類を獲る
6. 植食性魚類を食べる
7. 魚の磯焼けは回復するか

(独立行政法人水産総合研究センター 寺脇利信)

神田正人 著

大分県の海藻

二十余年にわたる調査で集積された標本資料に基づく「大分海藻誌」ともいべき著者渾身の書。緑藻(アオサ藻)67種、褐藻109種、紅藻257種、黄藻(黄緑藻)1種、海草(海産種子植物)3種の計433種を記録、うち分類学・生物地理学上興味深い70種についてカラー写真を掲載している。その同定には『南紀生物』主宰で知られた故山本虎夫氏をはじめ、吉田忠生氏、増田道夫氏、鳶田智氏、川口栄男氏、山岸幸正氏、馬場将輔氏ら当代屈指の専門家の尽力があったとのことで、単なる地方誌にとどまらない世界標準の目録となっている。大分県における海藻相研究史や海況・地名も詳説され、大分県への採集旅行に必携。(編)



自費出版, A5判, 117頁, 2006年8月, 1,300円(送料・税込み)。下記宛にハガキで申し込むと本と郵便振替用紙が送られる: 〒876-1102 大分県佐伯市二栄1191-1 神田正人 (ご不明の点は、☎0972-27-7657 神田まで)

ご出版の予定をお持ちの会員へ 2006～2007年に出版の御著書の情報をお寄せください。

必要事項: ①書名, ②著者名, ③出版社, ④サイズ, ⑤頁数, ⑥出版年, ⑦定価(税込), ⑧ISBN

情報提供先: 〒305-0005 つくば市天久保4-1-1 国立科学博物館

植物研究部 北山太樹「藻類書評・新刊紹介」係

Fax: 029-853-8401, E-mail: kitayama@kahaku.go.jp

